

腹腔内血管肉腫（犬）

- ▶ ラブラドル・レトリバー、14歳2か月、♀
- ▶ 主訴：起立困難、元気消失、呼吸促拍（来院日の朝から）
- ▶ 身体検査：可視粘膜やや蒼白、腹部痛、起立困難

▶ CBC（第1病日）

RBC($\times 10^6/\mu\text{l}$)	4.31↓	WBC($/\mu\text{l}$)	11770
PCV(%)	32↓	Band-N	0
Hb(g/dl)	11.2	Seg-N	9480
MCV(fl)	74.1↑	Lym	1020↓
MCHC(%)	35.0	Mon	1120
TP(g/dl)	5.4	Eos	130
PLT($\times 10^3/\mu\text{l}$)	156↓	Bas	20

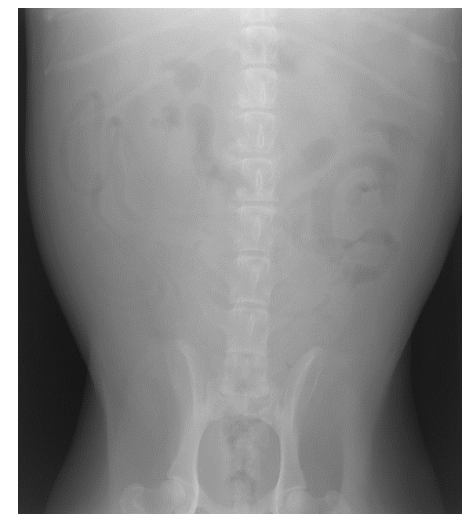
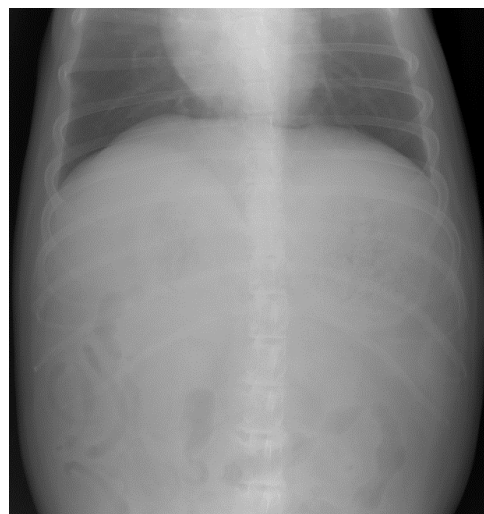
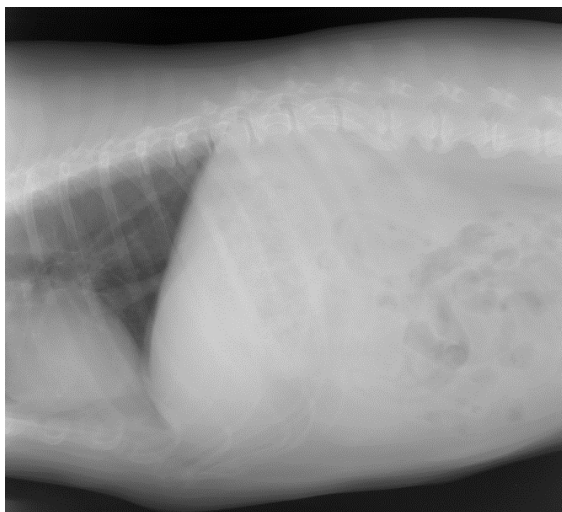
- ▶ 血液検査（第1病日）：CK 504(U/l)とCRP 1.2(mg/dl)の上昇
- ▶ 尿検査：異常なし

腹腔内血管肉腫（犬）

- ▶ 画像診断：胸部X線および腹部X線で異常所見なし



胸部X線



腹部X線

腹腔内血管肉腫（犬）

▶ 画像診断：超音波

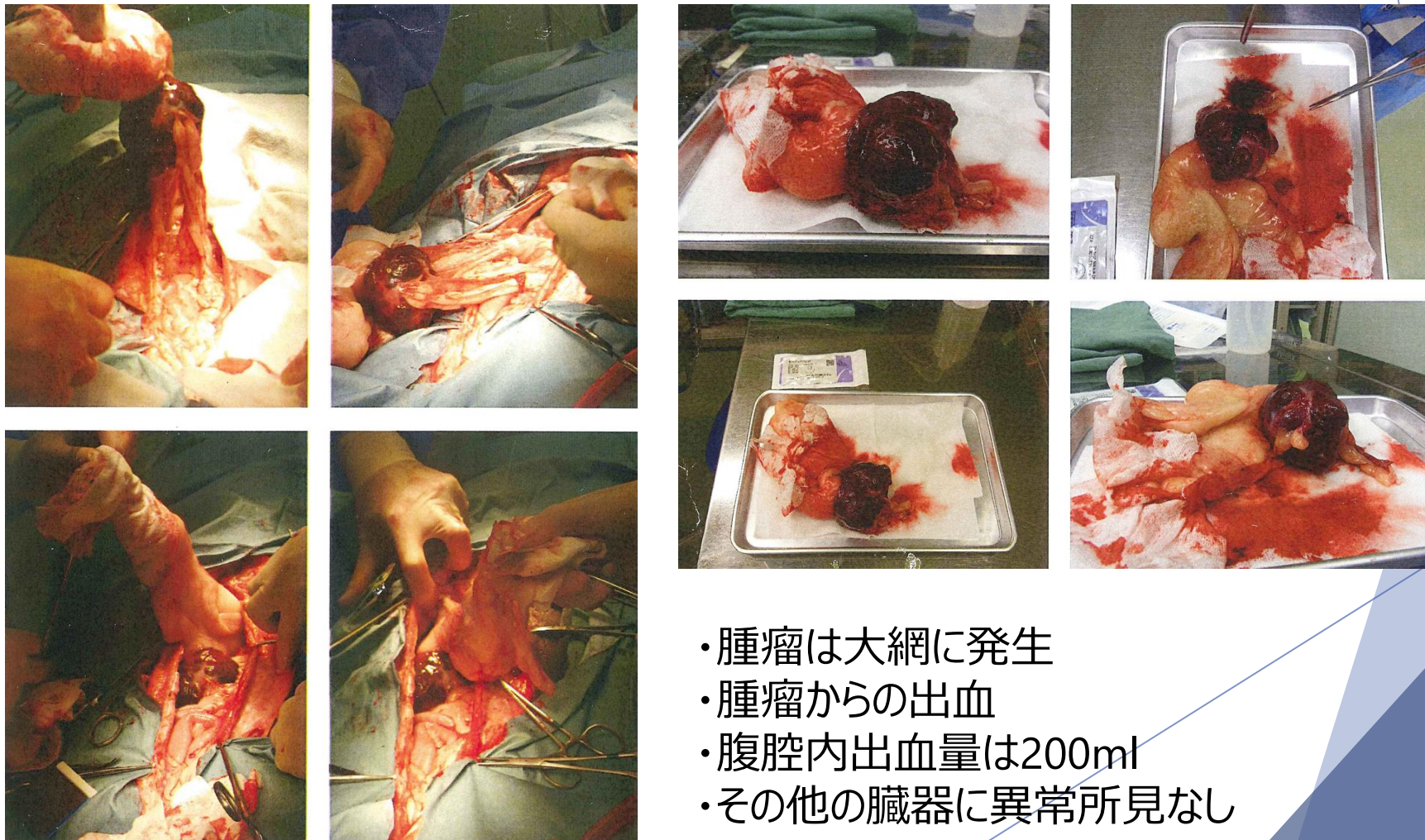


- ▶ 右腎頭側に直径6×5cmの腫瘤病変および腹水を確認
- ▶ 腹水検査：血液に近い性状、腹腔内出血の疑い
- ▶ 検査結果より腹腔内腫瘤からの出血の疑い

腹腔内血管肉腫（犬）

▶ 治療経過

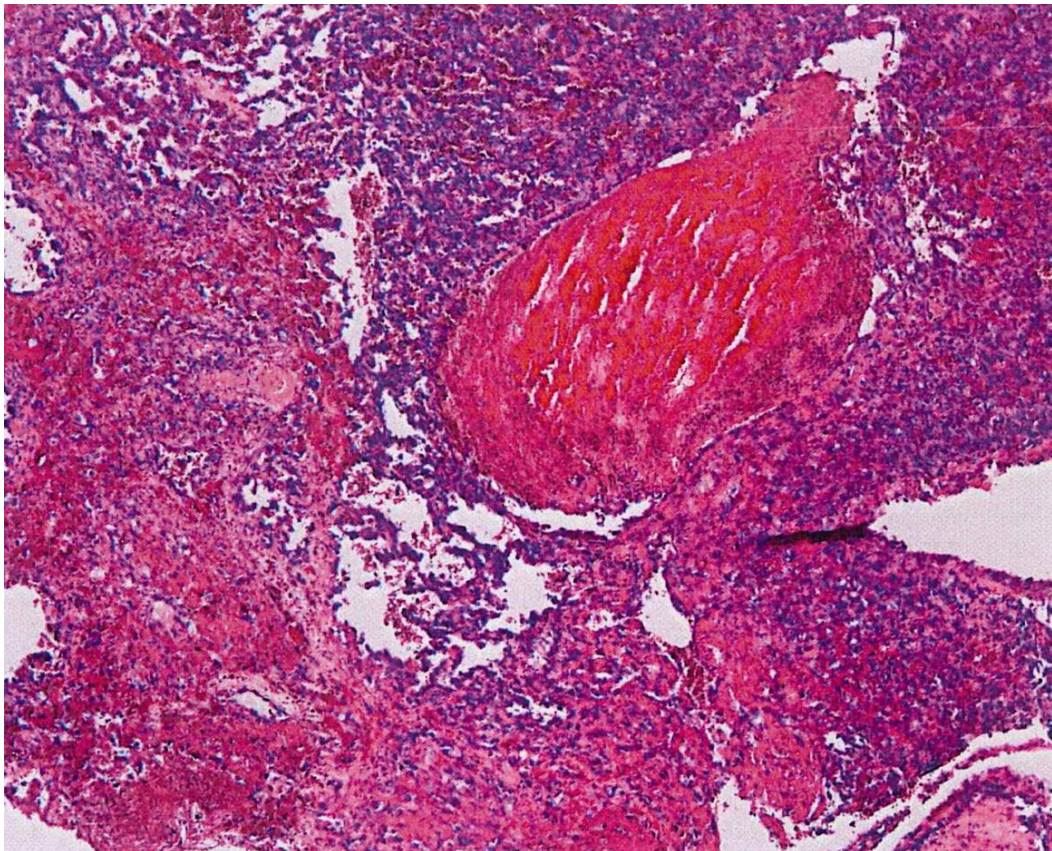
- ・第1病日～第2病日：ラクトリンゲル輸液、アンピシリン、塩酸ブプレノルフィン
- ・第3病日：開腹手術実施



- ・腫瘍は大網に発生
- ・腫瘍からの出血
- ・腹腔内出血量は200ml
- ・その他の臓器に異常所見なし

腹腔内血管肉腫（犬）

- ▶ 病理検査
- ▶ ・診断：血管肉腫
- ▶ ・ステージ分類：T2N0M0 ステージⅡ



- ・紡錘形から類円形の多形な非上皮細胞の増殖
- ・細胞は中程度の大小不同
- ・核の大小不同
- ・分裂像

腹腔内血管肉腫（犬）

▶ 術後経過

- ・術後10日頃までは起立困難状態だったが、リハビリを実施し歩行可能となった
- ・血管肉腫は転移率が高いが、オーナーとの話し合いにより化学療法は実施せず、活性化リンパ球療法を実施

▶ 活性化リンパ球療法

- ・第17病日に初回CAT投与（IV投与）
- ・以降、2週間ごとに計4回実施
- ・その後、月1のペースで計23回実施
- ・投与細胞数： $6.24 \times 10^6 \sim 144 \times 10^6$ cells

▶ 第232病日：血液検査、X線検査、超音波検査で異常なし

▶ 第660病日：老衰による死亡（良好なQOLを維持していた）

腹腔内血管肉腫（犬）

▶ 獣医師コメント

- ・血管肉腫摘出手術後の死因の大部分は、転移と報告されている
- ・本症例は外科手術により腫瘍が完全切除できたものの、腫瘍破裂による腹腔内出血が起きていたため、腫瘍細胞の腹腔内転移が生じる確率は非常に高かったものと考えられた
- ・しかし、手術時の肉眼的な血管肉腫の初期転移が認められなかったことや、高齢のため2次転移が発現しにくい可能性などが、生存期間延長の一助として関与していると考えられたため良好な結果が得られた
- ・このことから、先述のような予後良好因子だけではなく、活性化自己リンパ球療法を術後に実施したこともまた、微細な癌細胞の増殖を抑制するとともに、がん疾患による免疫力の低下が抑えられ、QOL 向上や生存期間延長に寄与したのではないかと考えられる
- ・本症例の経緯から、術後化学療法を選択しない場合において、活性化自己リンパ球療法が治療の選択肢の一つになる可能性が示唆された
- ・今後、血管肉腫に対する活性化自己リンパ球療法の治療効果を検証するべく、さらなる症例の積み重ねが必要であると考えている